

たたみ

畳

日本独自の床材

春夏秋冬、私たちのくらしにそっと寄り添い、くらしを支え、彩るみどりたち。
今回は古くから日本人に愛されてきた床材、“畳”について紹介します。

畳の材料

日本人なら誰もが知っている畳。畳は中材の畳床に畳表を張って仕上げられる日本独自の床材です。

畳表は経糸にイグサを編み込んで作られます。国産イグサで作った畳表は、耐久性はもちろん、日焼けしても均一な色味を保つため、長く使えるのが特徴です。

また、中材となる畳床は40〜50cm程度重ねた稲藁を5cmほどに圧縮して成形されています。「近年は人工素材を使った畳床も出回っていますが、藁製のものは耐久性が高く、足裏への当たりも柔らかいです」と語るのは、手作り・国産素材にこだわって畳を製作するもとやま畳店の本山さん。寺院の畳などは丈夫な藁の畳床を用いることで、400年以上使い続けられている場合もあるのだといいます。



中国産イグサの畳表。日焼けすると色がまだらに



国産イグサの畳表。日焼けしても均一な色味が保たれる



【イグサ】
単子葉植物イグサ科。湿地や浅い水中に生える植物で、泥に根を下ろす。緑色で表面にはつやがある。

畳の魅力

畳表・畳床に使用されているイグサや藁には湿気を吸収・放出する性質があり、高温多湿な日本においてこの調湿機能は家屋のカビなどを防ぐために有用でした。東南アジアにはゴザの文化を持つ国もありますが、畳という形の床材が発展したのは日本だけです。

特に京都は、古来政治や文化の中心地であった土地。畳が不可欠な茶室や寺院が多くあったことから、畳の生産も盛んに行われており、その技術・技能は国内でも群を抜いたものとなりました。

「和室は減少傾向にありますが、日本にしかない畳文化を後世に受け継いでいきたい」と本山さん。近年、海外からも注目を浴びている畳。夏の暑い日には、ひんやり心地いい畳に触れて、当たり前のものにこそ先人の知恵が詰まっていることを感じてみましょう。



畳を仕上げるには熟練の技が必要



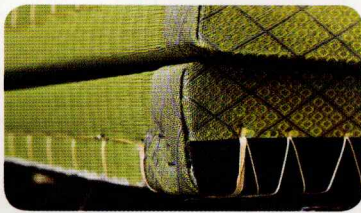
【藁(ワラ)】
米を脱穀した後の稲穂の茎部分。農家の減少により、畳床用の藁の確保が難しくなっている。

京たたみの特徴



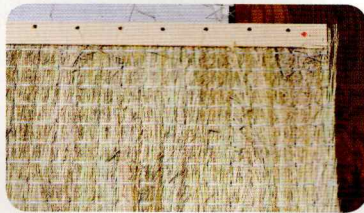
畳作りが盛んであった京都には独自の方法で作られた「京たたみ」と呼ばれる畳があります。その特徴を紹介します。

【角に角度をつけてカット】



畳床の角をわざと斜めに切り落としている。こうすることで、畳を敷き詰めた時に畳同士が一直線に隙間なく合わさり、畳の端が膨れず、段差ができなため、表面がきれいに均一になる。

【角に板をつける】



藁床の切断面を補強するため、短辺に木の板を合わせて縫い付ける。これにより角が立ち、仕上がりが美しくなる。このように角がしっかりとした藁床は100年以上も長持ちするのだという。



取材協力：
紫野 もとやま畳店 京都本店
京都市北区紫野門前町 45
TEL：075-491-8608

畳ってどんなもの？

畳の歴史は奈良時代から始まったといわれています。その後、茶道の発展などにより、安土桃山時代に民衆家屋の床材にも取り入れられるようになりました。畳に使われているイグサや藁には空気中の湿気や有害物質を吸着する性質があり、さらには消臭・浄化作用・リラックス効果も期待できます。



40〜50cmの藁を圧縮して作られている。これに畳表を張ることで畳が完成する

畳床の断面